東京都江戸東京博物館研究報告　第14号　2008年３月
Journal of Edo-Tokyo Studies, NO.14, P.13-24, March, 2008

【論　文】

徳川家康の城

加　藤　理　文*

目　次

１．はじめに
２．遠江進出と浜松在城時代
３．五ヶ国領有時代
４．中泉御殿の造営
５．肥前名護屋の陣所
６．関ヶ原合戦後の天下普請
７．隠居城としての駿府城
８．金箔瓦の行方
９．まとめ

キーワード　掛川攻めの砦網　浜松城　横堀の使用　駿府築城　工人集団　中泉御殿　瓦　肥前名護屋の陣所　天下普請　二条城　伏見城　江戸城　隠居城　金属瓦　金箔瓦　黒い城　白い城

１．はじめに

江戸250年間、天下泰平の世の基を開いた徳川家康は、元和２年（1616）駿府城において75年の波乱に満ちたその生涯を閉じた。75年の人生において、家康自らが心血を注いで築いた城は、極めて数が少ない。関ヶ原合戦における勝利によって、ほぼ天下政権を確実した後の築城は、全て天下普請での築城で、諸大名への割り当てによって築かれたためである。

家康自身が、最も心血を注いだ城は、元亀元年（1570）、29歳から44歳まで在城した浜松城と、その後天正18年（1590）、49歳まで過ごした駿府城であろう。だが、これら二城は、後に地域の拠点となり、幕末維新まで存続することになる。途中、大改修を受けているため、家康在城時代の面影は、全くといっていい程残されてはいない。

征夷大将軍となった後、大改修を施した江戸城も、二代秀忠、三代家光の改修とその後の火

*織豊期城郭研究会
磐田市立磐田第一中学校教諭

災焼失による再建によって、判然としない。そういう中、天下普請ではあるが、家康が隠居城とした最後の城・駿府城にわずかながら記録や家康時代の石垣が残されている。また、近年の発掘調査によって、天正14年（1586）に、中泉（静岡県磐田市）に築いたとされる城（御殿）の遺構が検出され、出土遺物等からも家康時代がほぼ確実な状況となっている。

家康は、その生涯の内、実に40年間と人生の半分以上を静岡の地で過ごした。そのため、居城ではないが、家康による築城もしくは整備改修が確実な城が、かなりの数残されている。時代的には、永禄年間後半から天正年間前半の時期（1568～1582頃）にあたる。発掘調査も実施されており、この時期の家康の築城術を知るに参考になる。前述の、御殿や駿府城の記録等から、家康がどのような城造りをめざしていたのかを数少ない資料から探ってみたい。また、織田信長・豊臣秀吉が築き上げた織豊系城郭と比較することで、家康の目指した城の姿が、おぼろげながらでも見えてくればと考える。

2．遠江進出と浜松在城時代

永禄11年（1568）、遠江に侵攻した家康は、旧今川諸将を味方に引きいれ、瞬く間に遠江西部地域を制圧してしまう。今川家の当主氏真は、武田軍によって、駿府館を追われ、掛川城へと逃げ込んだ。この時家康は、掛川城の周囲に砦網を構築し包囲している。臨時的な砦であるが、記録や発掘調査結果等から、当時の家康の築城術の一端を知ることができる。家康は、この時多くの砦を築いたが、『武徳編年集成』[1)]に残された記載を見ておきたい。「味方ノ六備掛川ノ城下ニ迫リ御旗本ハ相谷ニ屯ヲ設ケ玉フ…」と相谷砦の様子を伝え、兵が駐屯する場所を設けたことがわかる。長屋砦は「桑田村ニハ酒井忠次、石川家成柵ヲ結テ守リケルガ…」とあり、柵で囲って守っていたと記されている。また金丸山砦は、「金丸山ノ附城ニハ本丸ニ久野宗能同二ノ丸ニ同佐渡宗憲、本間五郎兵衛長秀ヲ籠置ル」とあり、本丸と二の丸が存在する砦であったことが伺える。掛川城攻めにあたり、大小様々な砦群が構築されたわけだが、駐屯基地とするため、柵囲いで防備した砦、本丸・二の丸というように、複数の曲輪が存在した砦と、目的や場所によって、その構造がかなり異なっていたことが判明する。唯一発掘調査が実施された杉谷城では、コ字状の土塁に囲まれた主郭と一段低い副郭、尾根筋を遮断する堀切と土塁が確認された。[2)]陣城であるためその規模は小さいが、永禄年間の徳川の技術を知る貴重なものである。

遠江をほぼ制圧した家康が、新領国の支配の拠点とした城が浜松城である。浜松城は、現在の馬込川の川筋を流れていた小天竜を自然の堀とし、城の北に犀ヶ崖へと続く溺れ谷となった断崖地形、東から南にかけて低湿地が広がる要害の地に築かれた。旧引馬城の西対岸の丘陵部に中心域を移し、さらに南へと拡張工事を実施し、旧城も、東の備えとして城域に取り込んでいる。

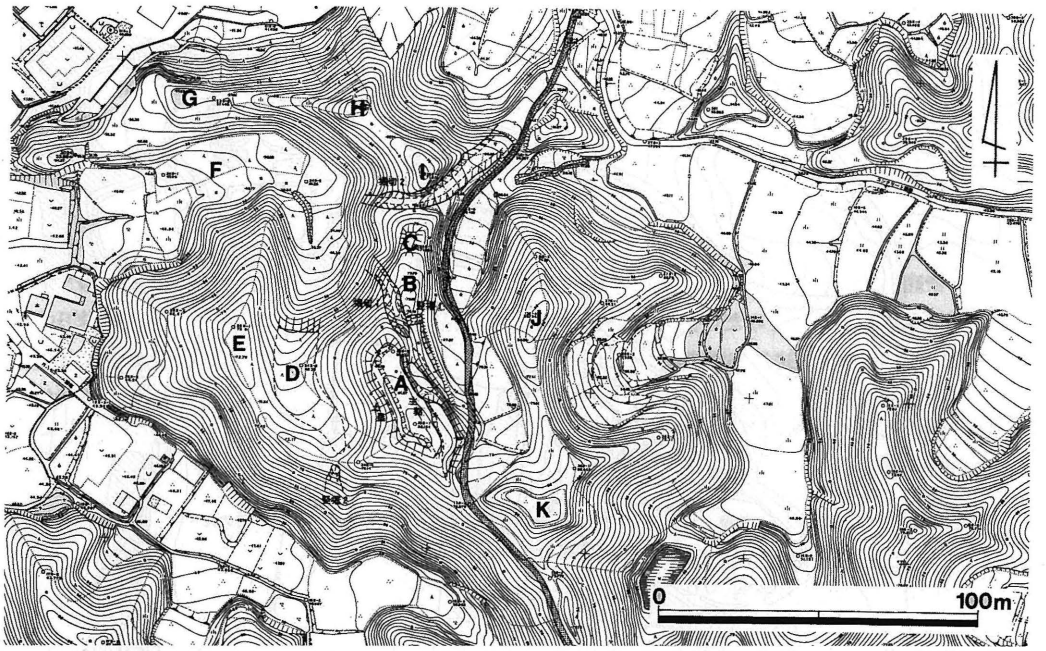

図1　杉谷城概略図（『東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』より転載）

家康が、浜松城に移ると、北と東から武田信玄が侵攻を開始。家康は、直ちに信玄侵攻ルートの支城網の改修を命じ、来るべき武田の侵攻に備えた。この時、家康が改修した主な城は、三岳城・千頭ケ峰城・大平城（以上静岡県浜松市）・宇津山城（静岡県湖西市）である。いずれの城も掛川攻めの砦群に比較し、はるかに進歩した構造となり、曲輪間を区切る堀切は、幅広で深くなり、その数を増している。また、堀切内側や外側に土塁を築き、防御機能の拡充を図っている。さらに、土塁囲みの曲輪が主要部に見られるようになった。[3] 当初期の浜松城も、これらの城以上に幅広の堀で囲み、主要曲輪には高い土塁が築かれていた可能性が高い。

家康による本格的な浜松城の改修は、武田勢力を北遠江から撤退させ、高天神城を孤立させた天正５年からのことになる。同年以降、『家忠日記』[4] 等に浜松城普請の記載が増える。また、高天神攻略と駿河侵入に備えた城普請の記載も見られ、遠江一国支配を確実にし、やがて駿河へ進出することを見越した築城が増加するのであった。この間に、徳川の築城技術は急激に進歩する。それは、遠江に進出した武田軍の城を接収したことで、武田氏の持つ築城術を取り込んだことが一番の理由であろう。中でも、「横堀」の使用が最も大きい変化であった。[5] 天正６年～８年の間に築かれた高天神城攻めの陣城・小笠山砦には、伝笹峰御殿を取り囲むように約200mに渡って壮大な横堀が現存している。また、巨大な丸馬出と二重の横堀で囲まれた諏訪原城も家康が改修しており、『家忠日記』に塀や堀普請の記載が見られる。近年の発掘調査でも、徳川氏による大改修の痕跡が確認されており、武田氏の持つ築城技術を取り入れた可能性を示

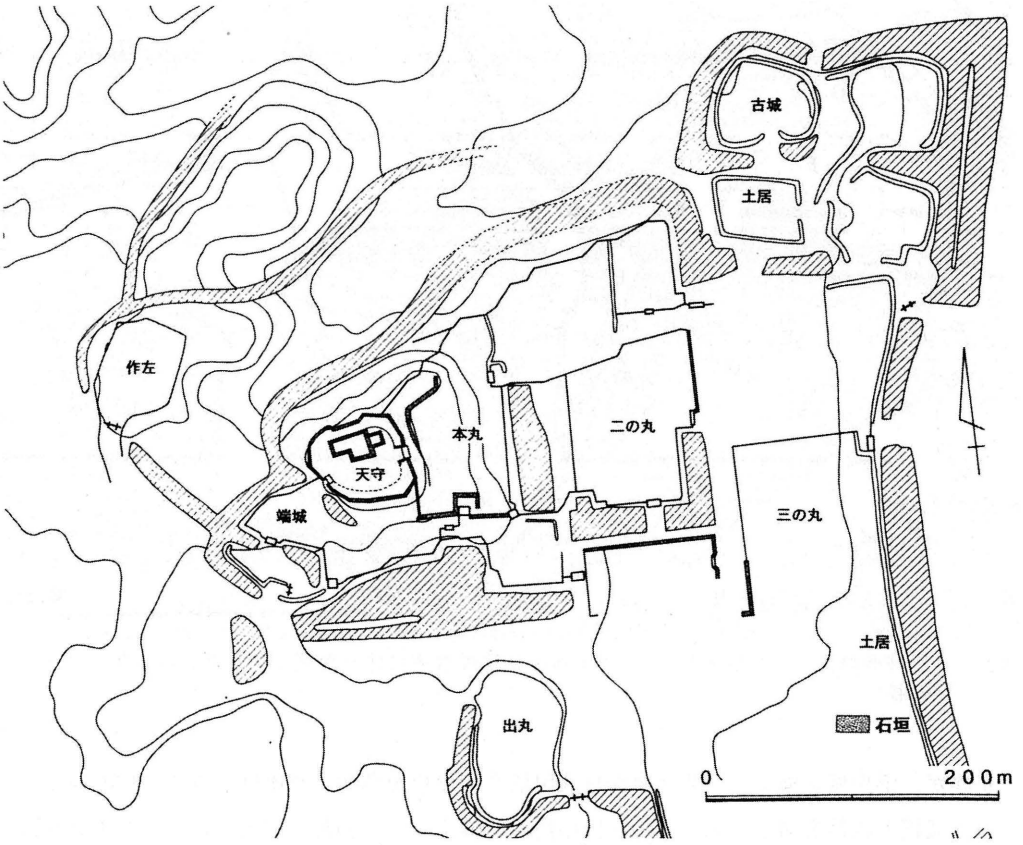

図2　浜松城概略図

唆している。[6)]

このように天正9年頃まで改修工事が続いたと考えられる浜松城は、武田氏の築城技術を取り入れた可能性が指摘される。北側「作左曲輪」や南側出丸を取り込むことを可能にしたのも、横堀の採用によるもので、中枢部を囲む堀幅をより広くし、防御構造を高くすることに成功し、その居城としての体裁を整えた。この時期、すでに織田政権下では、配下の有力武将までが瓦葺きの天守・石垣を持つ織豊系城郭を築き、土造りの城は時代遅れの城となっていたのである。だが、徳川家は未だ技術者集団を把握しておらず、石垣や瓦葺き建物を構築する段階ではなかった。事実、発掘調査でも家康時代に遡る石垣や瓦については、まったく確認されていない。[7)]

3．五ヵ国領有時代

本能寺の変後の混乱の中で、家康は甲斐・信濃へと進出し、またたくまに制圧。一躍、三河・遠江・駿河・甲斐・信濃の五ヵ国を領有する大大名となった。

五ヵ国領有すると、浜松城が西により過ぎていたため、かつての駿河守護今川氏の居館があった駿府の地への移転を決意する。駿府城内では、数多くの発掘調査が実施されているが、未だこの時期の遺構が確認されたことはない[8]。遺構そのものは残されていないが、築城工事の様子については、『家忠日記』に記されている。大規模な石垣工事の記載は見られないが、浜松城と異なり石垣を志向した様子が「石とり候」「石かけの根石をき候」「石かけ普請まいり候」等の記述から判明する。従来の徳川の城には、まったく石垣は採用されておらず、また「石を…」という記録すら見られないため、極めて特筆される出来事として捉えられる。駿府築城を開始した天正13年前後を境として、家康も石垣の必要性を痛感し、何とか取り入れようとした表れと評価される。この時の駿府城の石垣がどの程度あったかははっきりしないが、織豊系城郭のように総石垣は採用されてはおらず、部分的に門や重要地点のみの低石垣の可能性が高い。なぜなら、関東移封後の江戸城の様子や、駿府領内に分布する石材確保の場所、関東移封後に家康配下の有力武将達が築いた城の状況等を見れば[9]、この時点での家康の持つ工人集団や技術力が推察されるからである。前述の『家忠日記』には、建物についての記載も見られ興味深い。建物について触れているのは少なく、「小伝主てつたい普請當候」とある。明らかに、天守を上げたとか築いたという記述は無いため、「小伝主」がそのまま「小天守」のことなのかははっきりしない。小さな殿主建築という可能性も捨て難い。だが、浜松城の普請記録には見られない「石かけ」「小伝主」が登場してくることにより、家康の築城技術が確実に進歩していることが判明するのである。

4．中泉御殿の造営

家康は、駿府に居城を移すと、同年、天正６年に築いた小堡（砦）の地に城（御殿）を築きあげた。竣工は、翌年であったと「遠州中泉古城記[10]」には記されている。『徳川実紀[11]』等によれば、家康が伊奈忠次に命じて築かせた宿泊・休憩施設で、将軍の上洛や鷹狩りなどの際に使用されたとされ、忠次の手によったとするなら、江戸開府以後のことになり、時期的には慶長８年（1603）年のことになる。家康の築いた御殿は、寛永16年（1639）老朽化のため家光が修理奉行を任命し、改修したことが確実である（「大猷院殿御実紀」巻40）。

平成17年度の調査によって、この修理以前と考えられる遺構が検出された[12]。鍵の手に曲がる堀と土塁の中に、北を築地塀、南を掘立柱の塗壁で築き、東に掘立柱の薬医門を配する御殿の一部である。門の南に番所を配置し、東側においては、門に接続する布掘り等の明確な遺構が検出されず、築地塀の可能性が指摘されている。また、南側の塀は、建替えられており二時期を確認。御殿建築としては、御座間・広間・遠侍が推定されている。門は、南北一間×東西一間で、掘立柱となっている。門に使用されたと考えられる瓦は出土しておらず、屋根は柿葺と推定されている。若干数の瓦が出土しているが、その焼成及び技法、文様の特徴から数点が天

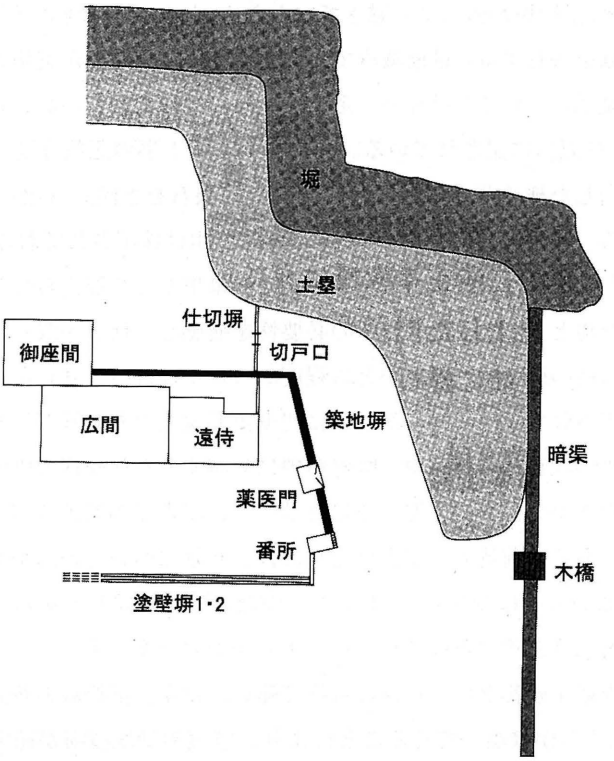

図3　中泉御殿前期遺構概略図（『御殿・二之宮遺跡第84次発掘調査報告書』より転載）

正期～慶長期と比定。この瓦の年代は、静岡県内での瓦の特徴にあてはめれば、天正18年以降、大坂夏の陣頃までとするのが妥当であろう。御殿のために新規に造られたものではなく、再利用の可能性が高い。見付周辺、もしくは横須賀周辺からの調達と推定したい。横須賀の地は、東大寺に瓦を調達した窯も確認されており、文様も横須賀城出土瓦に酷似している[13]。量的に見れば、極めて少ないため、特殊な施設のみの使用と考えたい。

5．肥前名護屋の陣所

天正18年、小田原攻めの論功行賞によって、関八州250万石が家康に与えられた。家康は、新領の拠点･江戸城に入城するが、城とは名ばかりで旧態然とした一砦のような体裁であった。「落穂集」には「…御城内の家には柿葺きのものは一カ所もなく、ようやく日光葺き・甲州葺きなどをもってかわりとした。…」とある程である。

江戸に入ったものの、居城改修以前に、秀吉の命によって、朝鮮出兵の本陣・肥前名護屋へ赴くことになってしまう。この名護屋の地に築いた家康の陣所から、石垣と瓦葺き建物が確認されている[14]。家康の陣所（本陣）は、名護屋城跡の北東約700mに位置し、名護屋浦の対岸殿

ノ浦に位置する別陣と併せ、名護屋湾口の入口を東西から押さえる要衝を占めている。

「肥前名護屋城図屏風」では、家康本陣に簡単な塀を持った二棟の建物が、別陣には、土塀を廻らした中に4軒の建物が見える。両陣共に発掘調査が実施され、様々なことが判明してきた。本陣は、高石垣と水堀によって囲まれており、瓦葺きの隅櫓を推定。石垣は、諸将の陣と異なり、打込ハギとなっており、この時期としては最先端の石垣である。また、諸将がほとんど瓦を使用していないにも関わらず使用していること、陣にも関わらず防御機能の高い隅櫓を有していることなど、堅牢な陣であった可能性が高い。

対して別陣は、土塁・石塁で囲まれた方形区画を中枢部とし、内部から礎石建物・掘立柱建物を検出しているが、瓦は一片すら出土せず、未使用であったことが判明する。[15] 二つの陣がこれ程大きく異なるのは、本陣が家康自身の居住空間としての役割を持ち、別陣が軍主力の駐屯施設として利用されていたからではないだろうか。さらに、その遺構から本陣については、家康自身の築城ではなく、豊臣軍による構築で完成した後、家康の陣所として指定したのか、家康に豊臣配下の工人集団を貸与し築かせたのかのどちらかであろう。石垣構築の水準や瓦の使用など、当時の家康が自らの居城で使用しなかった技術を、名護屋の陣のみ使用することは考えにくい。また、秀吉本陣の名護屋城に近く、その北東対岸を占拠することからも、豊臣によ

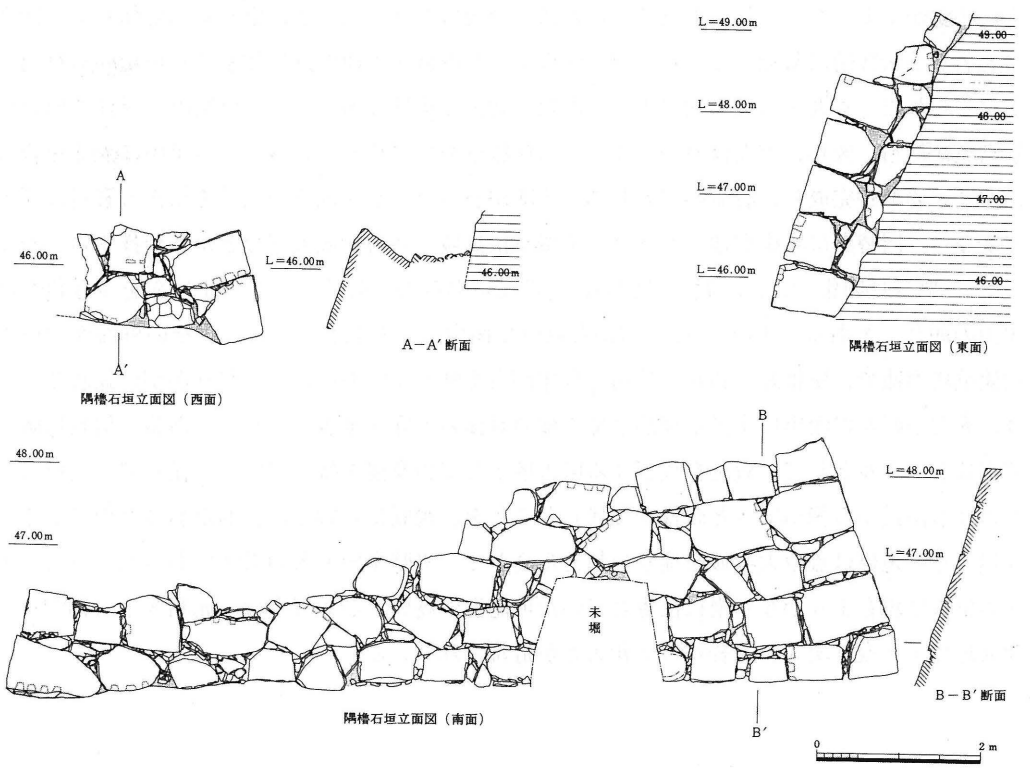

図4　徳川家康陣跡検出石垣実測図（『徳川家康陣跡』より転載）

る構築の後、家康を入れたとするのが妥当ではないだろうか。いずれにしろ、豊臣政権の中枢部での地位を確実にした家康は、秀吉の居城・大坂城や畿内周辺の織豊系城郭を内部構造までを含めつぶさに見、また伏見城などの手伝普請を通じて、土造りの城からの脱却と、土造りでも織豊系城郭に匹敵する築城術の必要性を痛感したと思われる。

6．関ヶ原合戦後の天下普請

秀吉の死によって、政権中枢の地位を確実にしつつあった家康は、江戸に帰ることもままならず、大部分を上方で過ごすことになる。当然、江戸城の改修も中途の状態で停止してしまう。家康にとって、居城の改修より、政権の奪取が最優先事項であったためであろう。関ヶ原合戦によって、家康は秀吉後継の地位を確実なものとすると、対朝廷交渉の拠点とすべく、天下普請で二条城を造営。ついで、伏見城の修築も諸将に命じている。「洛中洛外図屏風」等から、両城に長押柱型出の総塗籠真壁造りの白亜の姿の天守が存在したことが判明する。徳川方の京都本営となる白い二城がここに出現したのである。

慶長８年、家康は征夷大将軍に任じられ、江戸に幕府を開くことになる。将軍宣下により、江戸城は、一大名徳川氏の居城ではなく「将軍の城」となったため、それに相応しい体裁を整える必要が生まれた。最初に実施されたのは、今後の本格的な工事に備える基礎作りで、70家の大名が手伝普請に参加している。翌年から工事が本格化、西国外様28家に石垣用の石材調達が命じられた。本丸工事は、同11年より開始、縄張は築城の名手と言われ家康の信任が厚い藤堂高虎が担当。翌年、本丸御殿が完成し、二代将軍秀忠が移っている。この年中に天守を含めた本丸主要部が完成し、将軍の城の基本的体裁が整った。家康創建の天守を伝える資料は極めて少ない。同時期に家康が建てさせた二条城や伏見城、名古屋城天守などから類推するしかないが、『慶長見聞集』[16]には「殿主は雲井にそびえておびただしく、なまりかはらをふき給へば雪山の如し」とある。また、「夏も雪かと見へて面白し」と記されており、その外観が白亜の白漆喰総塗籠で、屋根瓦は鉛瓦を使用、全体が白く輝く姿であったことがうかがい知れる。信長、秀吉が好んだ漆黒に金箔が燦然と輝く城の対極の天守を築き上げたのである。信長以降、天守はシンボルとして、政権を代表する広告塔としての機能を持っていた。従って、白亜にしたのは豊臣氏から徳川家へと政権が交代したことを、視覚から訴える目的があったのである。当然、その規模は豊臣大坂城を遥かに超える高さで、当時全国最大の天守であった。なお、天守の位置は現在よりかなり南に位置していた可能性が高い。この天守は、元和８年（1622）二代秀忠により取り壊され、替わって新天守が造営されている。

7．隠居城としての駿府城

将軍職を秀忠に譲った家康は、慶長12年駿府の地に隠居城とすべく大城郭の築城工事を起こした。天下普請により、ほぼ完成域に達した築城技術の粋を結集して築かれた大御所の城は、信長・秀吉の築いた安土城・大坂城の豪華絢爛な姿と、徳川幕府が完成させた白亜の白壁が合体した当時我が国随一の芸術作品として完成するのであった。

築城工事は、急ピッチで進められたが完成間近に失火により天守を始め本丸の中心部が焼失してしまう。家康は直ちに普請人足を増員し、焼亡した城の再建工事を開始した。再建された第２期駿府城も、家康の死より20年を経た寛永12年（1635）城下からの火事で灰燼に帰し、その威容はわずかに残る文献及び絵画資料から推定するすべしか残されていない。

家康が築いた慶長期の城域は、従来の城を南・東・北に広げたという『当代記』[17] 他の資料から考え、天正期の中村一氏の城を一回り大きくしたことが確実である。駿府城の平面図を見ると、本丸・二の丸と三の丸の主軸方位が大きくずれていることから、三の丸部分こそが拡張された城域とする説もある。家康は、駿府築城にあたって、上方から江戸に向かう東海道からの眺めを重視して天守を築いた。宇津野谷峠を越え、安倍川を渡って駿府の町に近づくと、漆黒

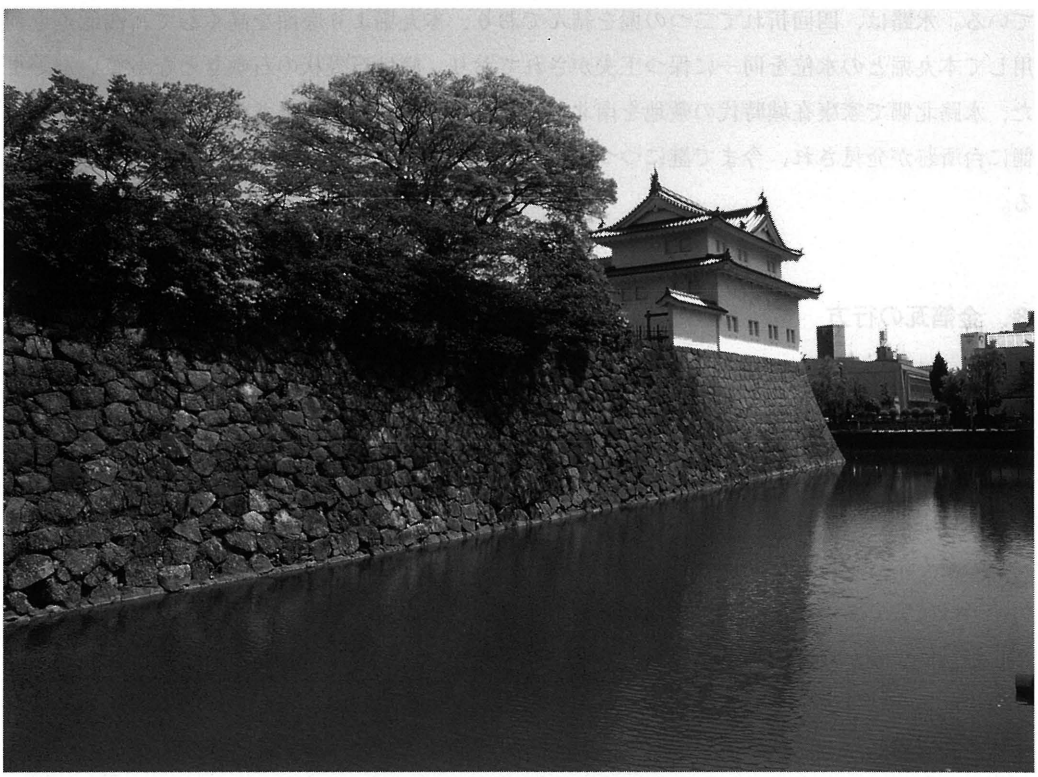

図５　駿府城に現存する徳川家康創築の石垣

で光輝く駿府城天守と真っ白な富士山の姿が覇を競うように並びたっていた。東海道を江戸へと向かう外様大名や旅人たちは、日本一の富士山より高い駿府城の天守に圧倒されたであろう。まさに大御所の権勢を示す城だったのである。

この天守については、『東照宮縁起絵巻』に描かれており、極めて特異な形状であったことが知られている。天守建築そのものは、寛永の火災によって焼失したが、天守台は明治29年（1896）まで現存し、旧陸軍築城本部が実測図を作成している。家康の天守台は大天守部分が石垣天端で約50×48mという我が国城郭史上空前の規模を持つ最大の天守台であった。各種資料から、天守は天守台石垣上には直接建たず、巨大な天守台を天守曲輪とし、四方に隅櫓と多聞櫓を巡らし、その中央の平場から建ちあがっていたようである。六重七階の日本史上最多重階の天守で、一階と二階に廻縁と高欄が設けられていた。白亜の江戸城天守とは異なり、漆黒の下見板張の外観で、屋根には江戸城天守に続き金属瓦が使用された。最上重が銅瓦、その他の階は鉛瓦であったと伝わる。軒先は金箔が貼られ、破風飾りは銀と金、駿河湾に面した静岡の陽光の下では、富士山以上にきらめく存在感であったと思われる。[18)]

現在残る城跡は、寛永12年の火災後に再建されたものであるが、基本的な構造は家康の城をそのまま踏襲している。各種絵図から、他に例を見ない本丸堀と２の丸堀を結ぶ水路があり、その上を御水門櫓が渡るという特異な櫓の存在が知られていたが、発掘調査により再確認されている。水路は、四回折れて二つの堀を結んでおり、本丸堀より底面を高くして、高低差を利用して本丸堀との水位を同一に保つ工夫がされており、底は石畳状の石敷きとなっていた。[19)] また、水路北側で家康在城時代の敷地を南北に分断する中仕切りが検出され、北側に御殿跡、南側に台所跡が発見され、今まで謎につつまれていた家康の駿府城の姿が徐々に解明されつつある。

8．金箔瓦の行方

信長・秀吉時代に、政権のシンボルとして多用され、その使用について多くの規制や許認可が介在した金箔瓦[20)]は、家康の江戸城、二条城、伏見城などに採用されていない。なぜ家康は、金箔瓦を己が居城に採用し、許認可制としなかったのであろうか。規制が無かったことは、秀吉の死後、仙台城[21)]で伊達政宗が、山形城[22)]で最上義光らが使用しているため確実で、江戸の大名屋敷の多くにも使用が認められる。[23)] 当然、江戸城からも出土しており、大々的では無いが部分的使用は確実である。出土状況の他から類推すれば、規制緩和があって嗜好品に変化しているとしか言いようがない。

戦国乱世をほぼ統一させた織田信長は、自分が天下の覇者であることを知らしめるために、金箔瓦を考案した。諸国に割拠する群雄たちとの違いをアッピールすることで、天下統一を訴えようとしたのである。秀吉は、正当な織田政権の後継者であることを認めさせるために、信

長の規制や許認可を踏襲していかざるを得なかった。また、信長以上に強大な権力を掌握している存在であることを知らしめなければならなかったのである。だが、家康は、統一政権を掌握したのである。そこに、大きな違いが生じている。すでに、諸国に群雄は割拠していない。豊臣と言う名のもとに統一政権は完成していた。その権力をまるごと奪取したのである。しかも、朝廷から征夷大将軍を拝命し、早々と秀忠へと世襲を実施したのである。あっという間に徳川家は、官位叙任権や領国の増減封、家の存続権までをも掌握してしまった。それ以上の許認可制度は必要としなかったのであろう。金箔瓦の規制より、実務的な一国一城令や城郭の修復届出制という確固たる規制を優先し、政権を磐石にしていったのである。

9．まとめ

家康の築城の足跡をたどることによって、家康の城造りの姿が少しずつ見えてくる。まず指摘出来ることは、家康自身が把握していた工人集団（城郭建築技術者）の少なさである。信長・秀吉が、石垣、瓦葺き建物の城を次々と構築する中、家康は中世以来の伝統的な土造りの城を築いている。その所領が、三河・遠江という極めて石材調達に困難な地域であったことを差し引いても、あまりに少なすぎる。石垣構築集団や瓦職人という工人を組織することが出来なかったためと理解したい。石垣、瓦葺き建物の導入という城の近世化は、畿内を中心に急速に普及したのは事実である。当然、そこに為政者である信長・秀吉の意思が強く介在していた。信長・秀吉はもちろん、配下の武将たちもこぞって城の近世化を志向し、工人集団の掌握に努めたことは間違いない。家康は、畿内から離れた支配地にあり、しかも彼らの配下の立場ではない。あくまでも、同盟者・協力者の立場を維持し続けたのである。そのことが工人集団掌握に遅れをとり、城そのものの近世化までいかなかったのであろう。

その工人集団の把握で遅れをとったことを逆手にとったのが天下普請による築城であった。技術者を持たないがために、自己の強大な権力を背景として、各武将の手持ちの技術者を使用させる築城方法を定着させたのである。自身の技術者不足を補いつつ、経済的負担も抑える、まさに一挙両得の戦略であった。関ヶ原での勝利の後、築いた京洛の拠点である二条城、伏見城、さらに将軍の城江戸城、そして豊臣大坂城の上に築き上げた大坂城。いずれの城も、白漆喰の白亜の姿であった。だが、白亜の城こそが、家康好みの城であったとは思えない。信長・秀吉と続いた政権では、常に漆黒に燦然と輝く金箔瓦が覇者の城であった。政権のシンボルとなる天守であったがために、変化させることが必要だったのである。黒から白という、まったく対照的なシンボルを築くことによって新政権が樹立したことを、知らしめたと考えたい。従って、家康好みではなく、徳川政権としての城が白い姿だったのである。

将軍職を秀忠に譲った家康が駿府に築いた隠居城は、漆黒の燦然と金箔瓦が輝く、まさに信長・秀吉の延長戦上にある城であった。安土城、大坂城という覇者の城を見続けた家康は、い

つか自分もあのような城持ちになりたいと思い続けたはずである。徳川政権が世襲された以上、徳川の城、将軍の城は江戸に存在している。初めて、家康は隠居城として、好みの城を築けたのであった。燦然と金箔が輝き、漆黒の姿をし、しかも廻縁と高欄を持ち、いつでも天下人として外を眺めることが可能な城。家康の長年の夢は、駿府でかなったのである。徳川政権の樹立と安定のために封印していた好みを、隠居して初めてあからさまにしたのが駿府城ではなかったであろうか。信長・秀吉に追いつき追い越したことを、天守最上階に登り、陽光きらめく駿河湾を眺める度に実感する、年老いた家康の姿が目に浮かぶ。

かなり、想像を膨らめた読み物的論考となってしまった。幕府のために将軍として築いた城と、家康が築きたかった城はちがうのではないかと、駿府城絵図を見る度感じていた。今回は、自分が感じていたことをとりとめもなくまとめただけにすぎない。改めて、もう少し掘り下げた論考として完成させる機会を持ちたい。

【註】

1) 木村高敦編『武徳編年集成』（名著出版、1976年）。
2) 加藤理文「徳川家康による掛川城包囲網と杉谷城」（『東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』掛川市教育委員会、2002年）。
3) 加藤理文「千頭峯城の再検討」（『考古学論集 東海の路』東海の路刊行会、2002年）。
4) 竹内理三編『増補続資料大成 家忠日記』（臨川書店、1981年）。
5) 加藤理文「遠江・馬伏塚城の再検討」（『（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』静岡県埋蔵文化財調査研究所、2004年）。
6) 萩原佳保里「諏訪原城跡の現状」（『武田流築城術の傑作！諏訪原城』島田市教育委員会、2007年）。
7) 『浜松城跡 考古学的調査の記録』（浜松市教育委員会、1996年）。
8) 『発掘された駿府城跡』（静岡市立登呂博物館、1994年）。
9) 『史跡箕輪城跡Ⅵ・Ⅶ』（高崎市教育委員会、2006・2007年）。
10) 『中泉町誌』（静岡県磐田郡中泉町梅原村組合役場、1923年）。
11) 『国史大系 新訂増補 徳川実紀 第1篇』（吉川弘文館、1990年）。
12) 『御殿・二之宮遺跡第84次発掘調査報告書』（磐田市教育委員会、2006年）。
13) 加藤理文「横須賀城出土瓦から見た豊臣政権の城郭政策」（『史跡横須賀城跡史跡等活用 特別事業報告書』大須賀町教育委員会、1999年）。
14) 『徳川家康陣跡』（鎮西町教育委員会、1986年）。
15) 『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」10 徳川家康別陣跡発掘調査概報』（佐賀県教育委員会、1993年）。
16) 中丸和伯校注『慶長見聞集』（新人物往来社、1969年）。
17) 史籍雑纂第2所収『当代記・駿府記』（続群書類従完成会、1995年）。
18) 『大御所徳川家康の城と町』（静岡市教育委員会、1999年）。
19) 『駿府城跡Ⅰ（遺構編）』（静岡市教育委員会、1996年）。
20) 加藤理文「金箔瓦使用城郭から見た信長・秀吉の城郭政策」（『織豊城郭第2号』、1995年）。
21) 『仙台城 しろ・まち・ひと』（仙台市博物館、2001年）。
22) 『発掘された山形城三の丸跡』（最上義光歴史館、2005年）。
23) 西秋良宏編『加賀殿再訪』（東京大学出版会、2000年）。